

1998年12月8日発行

新宿

ダンボール村通信

第13号

編集・発行 新宿連絡会

定価 300円

特集

<ザ・仕事> 後編

路上で紡ぐ
今日を生きる

特集

<ザ・仕事> 後編

路上で紡ぐ 今日を生きる

銅線拾いとしている下畑さんのこと

松岡 敏 2

♪ 本集め同行記

出口 万記子 5

都市雑業万歳!

笠井 和明 7

新宿写真館

大島 俊一 9

底

辺下層に組み込まれた
労働者がたどる最下層の環流点

笠井 和明 11

銅線拾いをして いる 下畑さんのこと

松岡 敏

銅線を拾い歩き、集めたものを銅線屋に売り、わずかのお金を得て生きる。終戦直後の混乱期には、そうすることで生計を立てていた人たちが大勢いた、というのを何かで読んだことがある。この仕事に名前を付けるとしたら、銅線拾い、銅線屋とでも言うのだろうか。捨てられたものを回収するから、やはり「バタ屋」というのだろうか。

野宿・日雇い労働者やホームレスの取材をしていると、さまざまな路上の仕事をしている人たちに出会う。まさかと思うかも知れないが、平成のこの時代にも、銅線を拾うことで、かろうじて命をつないでいる人たちがいる。私が、そうして生きている人がいることを知ったのは、日本最大のスラム・ドヤ街、釜ヶ崎に初めて行ったときのことだった。

97年12月中旬から、98年1月下旬まで、釜ヶ崎のドヤに泊まり、生活費を日雇いの土木労働で稼ぎながら取材をしていた。といっても、毎日、仕事にあり

つける訳ではない。仕事にアブれると、付近をブラブラと歩き回りながら、人と出会って話を聞き、時には道端で酒を飲み……。そんな中で知り合ったのが、52歳の下畑さんだった。道端に座り、黙々と銅線の被覆を剥いている姿を見て、

「親父さん、銅線を売るのは儲かるの？」と、声をかけたのが最初だった。

「儲からん。さっぱりや。せいぜいタバコ賃ぐらいやけど、兄ちゃんもやるか？やる気あるなら教えてやるで」

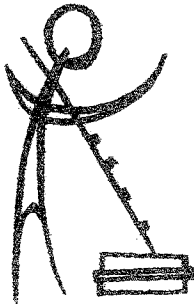
下畑さんの目には、私が「仕事にアブれて金がない兄ちゃん」と映ったようだ。とりあえず事情を説明して、仕事の件は辞退したが、興味があったので、仕組みだけは聞いてみた。

銅線の買い取り価格は、1 Kg40～90円。線の細いものほど安く、太くなるに従って高くなる。捨ててある銅線は、ビニールの被覆を剥き、約1 Kg大に丸める。一日中、頑張って歩き回っても、10Kgは拾えないという。

「でも、拾えんことはないからな。センター（あいりん公共職業安定所＝寄せ場）に朝早く行っても、仕事にありつけるかどうかわからん。あんたみたい若くても、アブれるご時勢やからな。仕事になけりや収入ゼロ。銅線拾うほうがマシや。1日500円、800円にしかなくても、こっちのほうが堅いわ」

話しながらも、下畑さんは煙草を吸うとき以外、作業の手を止めない。だが初対面で若造の私の質問にも、きちんと誠実に答えてくれた。歯切れの良い口調で、気さくな感じ。以来、暇があれば私は、下畑さんが作業しているところに通り詰め、さまざまな話を聞いた。「酒はやめた」という下畑さんを訪ねる時の手みやげは、缶コーヒーか煙草。でも、一方的にモノをもらうのが嫌だったのだろう、いつもお返しがあった。それは、なけなしのお金で買った食パンやロールパンだった。

下畑さんは、大阪市天王寺区の生まれ。育ったのは九州の炭坑町。「母親は生粋の浪速っ子だった」と話してくれたが、父親の話は一度もしなかった。事情があるのだろう。



高校卒業後は大阪に戻り、工場設備の溶接職人になった。以来、50歳を越えるまで、ずっと溶接職人一筋で生きてきた。銅線のビニール被覆を剥く手際の良さから、腕の立つ職人だった雰囲気が見受けられる。釜ヶ崎に住み始めてからは、25年以上になるという。

「大きな工場の新築やら改装やらで、あちこちの工場に行ったで。3ヶ月、半年で移動しとったから、ドヤ暮らしが一番便利。でも横浜にある大工場では、2年ほど働いとったで。年金も保険も払ってな。居心地ええとこで、ずっと居たいと思うとったら、オイルショックや。『3ヶ月休んでくれんか』言われて、そんなに遊んでられんから、また大阪に帰って来たわ。あのまま横浜におれば、人生変わっとったやろうなあ……。

それでも、96年中は溶接職人としての仕事で食べていけたという。しかし、97年に入ってから、職人はおろか、土方仕事すらありつけないようになってしまった。

「でな、3月から公園でアオカン（野宿）や。で、銅線拾ってれば、なんとかしのいでいける。300円の弁当に、食パン、カップ麺、煙草はなんとか買える。たまに昔の仲間が食べ物やら買ってきてくれるしな。死にはせんわ」

明るく笑いながら話してくれたが、髪はしばらく洗ってないからパサパサ、顎ひげ、口ひげは伸び放題、服装だってみすぼらしい。ちょうど年末年始の越冬対策として、大阪南港の臨時宿泊所が開設される時期。私は、宿泊に行かないのかと訊ねた。すると、「わしはなあ、行政のお情けにすがってまで布団に寝とうない。ボランティアのやってる炊き出しにだって、いっぺ

人も並んだことないで。他人の施し受けるのは好かんのか。人様に迷惑かけるのも好かん」

怒られた。意外なほど、こう言う野宿労働者、ホームレスは多い。誰かが何かしてくれるのを待つ「怠け者」ではないのだ。

また下畑さんは、寝泊まりしている公園を誰にも教えない。私にも絶対、教えてくれなかった。他の野宿者が来てゴミを散らかすと、自分まで追い出されるからだ。だが、正月に風邪で寝込んだときは、困ったという。高熱が出て動けず、助けを呼ぼうにも声すら出せなくなり「さすがに死ぬかと思うた」という。

そんなギリギリのところできているにもかかわらず、下畑さんはあれこれ私の心配までしてくれた。

「ニシナリ（釜ヶ崎）には、ええ人間もおるけど、悪い奴も多い。こんなとこずっとおらんで、はよ親や友だちのおる東京へ帰ったほうがええで。あんたがおらんと、寂しくなるけどな」

1ヶ月弱の間に、わずか10数回会っただけの私に下畑さんは、いつも優しい気遣いの言葉をかけてくれた。だから、なおさら彼に惹かれてしまったのかもしれない。あれ以来、大阪には行っていないから、彼が今、どうしているか知る由もない。まだ毎日、阪堺電車の線路脇の路上に座り、長年の労働で太く堅くなったゴツゴツした手で、手際良く銅線の被覆を剥いているのだろうか。

☆ 関東では久しぶりの雨が降りはじめ、いよいよ寒くなってきました。風が冷たさを増し、木の葉も散りはじめています。いかがお過ごしでしょうか。

新宿ではそろそろ越年越冬の季節を迎えようとしています。今年は西口地下街に火災が起きるといふ悲しい出来事があり、「ダンボール村」と呼ばれたコミュニティ空間が失われました。例年地下街で行ってきた越年の場所は、今年は中央公園に移されます。お役所も閉まるこの時期、皆で身を寄せ合って生きるこの場所に、どうぞいらっしゃいませんか。12月27日より1月4日までの間、新宿中央公園ポケットパーク（北門広場）にて、さまざまなお正月行事なども交えて行われます。12時～7時は必ずいます。お手伝い頂けたら、うれしい限りです。

◆ 遅ればせながらこの間「タイタニック」を観ました。これが本当にあった出来事なのかと思うと、やはり驚きます。極限の状態の中では、こんな恋もあるのでしょうか。

○ 2号にわたった仕事特集、前号の「寄せ場」に続き、今号は「路上の仕事」を特集しました。ここに書かれた銅線拾い、本集めの他にも、ダンボール集め、ビラ貼り、看板持ち、野球のチケット売場に並ぶ等、路上では沢山の仕事が行われています。その多くは、やっと一日の食費を得られるかどうかの金額で、身体にもしんどい仕事です。土方仕事につけない野宿者の多くは、そうした路上の仕事で、命と生活を紡いでいます。

雑

記

◆ 様々の特集、写真館や論文をお届けしてきた新生ダンボール村通信も、とうとう次回最終号を迎えることとなりました。最終号を前にした機会に、今まで載せてきた記事への感想、批判、もしくは野宿者や社会に対して感じていらっしゃる事など、ぜひ知らせて頂けないでしょうか。この通信を窓口にして、つながり合えたらと思います。また、ダンボール村通信を閉じたあとは、更なる充実を経て、新宿連絡会より新たな雑誌をお届けする予定です。今後ともよろしく願いいたします。

風邪もはやり出すこの季節、ご自愛し、お過ごしください。



循環する雑誌本のゆくえ

あるみたいだ。2つ目、なし。埼京線ホームへ。移動途中で1冊get! この日初めて手にした本は「週刊ポスト」。埼京線ホームで、2つの入れ物を探して5冊get! ちゅうさんは手際よく本を取り出し、紙袋に詰めていく。山手線ホームへ移動。1冊get! 5、6人の人がこつちを見た。人目が少し気になるが、やはり人が多いと捨てられる本も多いようだ。

8:40 大塚着。同業者の人が4人いた。競争率が高い。ここでは0冊。本集めは運勝負だと思った。本を捨てるタイミングと拾うタイミング。捨てる神あれば拾う神あり、という言葉を思い出した。

8:50 目白着。ここも人が多い。ここでは4冊get! ここまでで11冊集まって紙袋がいっぱいに。地道にやればたまる、とちゅうさんは言う。

9:00 高田馬場着。三つの入れ物を探して2冊get! 本集め開始から1時間が経過。早足は変わらない。

9:10 新大久保着。紙袋がいっぱいなので、大きな袋に入れ替える。けっこう重そう。三つの入れ物を探して1冊get! 一緒に出した新聞を読みながらしばしの休憩。

9:24 新宿着。新宿への車内で網棚から1冊g

向に衰えず。早い、早い。集めた本が重そうだ。

10:35 市ヶ谷着。三つの入れ物を探して1冊get!

10:40 四谷着。中央・総武線のホームを端から端へ探しながら歩き、中央線ホームも端から端へ。また中央・総武線ホームに戻る。結果3冊get!

11:00 信濃町着。11時過ぎに信濃町のホームで買い取り。今日の結果は、8時からはおよそ3時間、降りた駅17駅、集めた本33冊。電車に乗ったり降りたり、階段を上ったり降りたり、入れ物の中を探しながらホームの端から端へ早足で。しかも重い本を持ちながら。本集めは思ってたよりハードな仕事だと思った。集めた本は1冊40円なので、33冊では1320円で売れる。今日の本の集まり具合は「まあこんなもん」とのこと。集まるときは40冊ぐらい集まるそう。

11:30 ちゅうさんとホームで別れる。ちゅうさんはこれから夕方の5時ぐらいまでまた本集めをするという。本集めのピークは朝8時から10時くらいだけど、今から5時ぐらいまですれば朝と同じ位集まるそう。そう言っただちゅうさんはまた電車に乗っていった。

本集め同行記

出口 万記子

本集めとは駅の雑誌入れや電車の中などに捨てられた週刊誌などを集めて買い取りの人に売る仕事で、だいたい一冊40円くらいで売れる。買い取りの人はそれを一冊100円で路上で売るといふふうになっている。今回は10月9日、週刊誌の発売が多く、稼ぎ時という月曜日にちゅうさんの本集めに同行させてもらった。

7:50 JR新宿駅で待ち合わせ。山手線に乗る。

8:05 新大久保着。ホームの新聞・雑誌入れを開けて中を捜す。一つ目、なし。早足で次の入れ物へ。二つ目、同業者の人に先に取られる。また早足で次へ。三つ目、電車が止まり出発するのを入れ物の前で待つ間に同業者の人に先に取られる。ホームの端から端まで歩いたけど、ここでの収穫は0冊。

8:10 高田馬場着。入れ物のそばに立って、誰かが捨てるのを待っている同業者の人がいた。ホームでもう一人同業者の人を見かけた。ここでも0冊。

8:16 目白着。0冊。

8:22 池袋着。人が多い。一つ目、そばでさりげなく本が捨てられるのを待つ同業者の人がいた。ひとつの入れ物のそばでじっと待つという集め方も

et! 電車に乗ってる間も気を抜かない。新宿では同業者の人を3人見かけた。本当にどの駅でも必ず1人は同業者の人を見る。ライバルが多い。中央・総武線へ。新宿では0冊。

9:31 千駄ヶ谷着。すごい! 改札近くの入れ物から11冊 get! こんなに入ってるのは珍しいそう。上のホームでも2冊 get! これで28冊。28冊・。すぐく重そう。ちゅうさんいわく、「あとは持てる限界との勝負」。

10:05 四谷着。電車の中やホームで、ジャンプやヤングマガジンなどを読んでいる人を見かけると、早く読み終わって、と思うようになってきた。ここでは0冊。

10:09 市ヶ谷着。1冊 get! 本集めは本当にリサイクルだ。時々人目が気になるけど、立派な仕事なんだから堂々とやれば良いと思った。それにしても週刊誌を読む人の多さ、捨てる人の多さには驚いた。大量消費だなあ。

10:18 飯田橋着。そろそろ雑誌を持っている人を見かけなくなる。8時から10時というピークを過ぎたのだろう。

10:23 水道橋着。本集めを開始してから2時間半くらいになるが、ちゅうさんの歩く速さは一

都市雑業万歳！

笠井 和明

本屋というのは、瞬く間に野宿者層の花形産業になった。その構図は極めて簡単、拾い屋がいて、買取り屋がいて、売り子がいて、だ。100円というリーズナブルな価格で読み捨てられた古本をリサイクルする。循環型社会を標榜する青島都政が何故、このすばらしき産業を保護せずに取り締まるのか、全く理解不能である。森林資源の無駄は地球環境上よろしくない。私の住み家の近くには古紙工場が多くあるが、読まれずに捨てられる雑誌や本は想像以上に多い。まさしくゴミと化すのであれば、漫画であろうが、週刊誌であろうが、より多くの人々に回し読みされる方がよっぽど効率的であり、これが本来の文化というものであろう。

青島都政のしょうがなさは、政策は口先だけで、実際は古紙産業やリサイクル産業をまったく保護せずに、価格の暴落を誘導している点である。ダンボールを夜な夜なリヤカーで何度も集め、それでせいぜい数千円という、秋葉原を中心とするダンボール回収を営むおっちゃんらは私が訪れる度に「また下がった」「また下がった」と政策の貧困を嘆く。多摩川の土手あたりで鉄屑などをせっせとチャリンコで集めているおっちゃんらもこれまた同じことを言う。「廃品回収ってのは昔は儲かったんだけどなあ」

この不況の中、巷の公園などではフリーマーケットが盛んである。フリーマーケットと言うと放蕩生活に突然目覚めたブルジョア主婦の副業的なイメージ(本業の方は失礼)が私にはあったが、これも百聞は一見にしかず、実際訪れて見るとテキヤ系の人々が何と多いか。昔のダンボール小屋仲間が売り子をしていたりして「なんだお前さん、こんな事してたんだ！」と私が言うと、「エへへ、立派にダンボールから卒業しました」なんて照れ笑い。これまた産業みたいなものでこれで食っている人々は確実にいる。

今や庶民は、とりわけ底辺の人々は、青島に言われるまでもなく、とっくのとうに循環型社会なのである。いかに無駄なく生きて行くか、貧困を強いられれば強えられる程、考えてみれば当たり前の事である。

この世では何故か、生産をしていない働き人は正当な評価を受けない。これらの産業も全て「雑業」の一言で片付けられてしまう。だけど、こういう産業は社会が必要とするから成り立つ訳で、そこで働く人々はいくばくかの収入が得られるのである。だけど、これをそのまま放置しておいて良い訳がない。同じ8時間働いたとして方や数百円から数千円、方や万単位。これじゃあまりに不平等だ。こういう点にこそ政策が問われているというのに、我らが青島都知事は「あの方たちは独特の哲学と人生観…」だから「不法な流通や路上販売は許しません」と来る。不況下の混迷都政はまだまだ続きそうで、この業界も先行きが暗い。

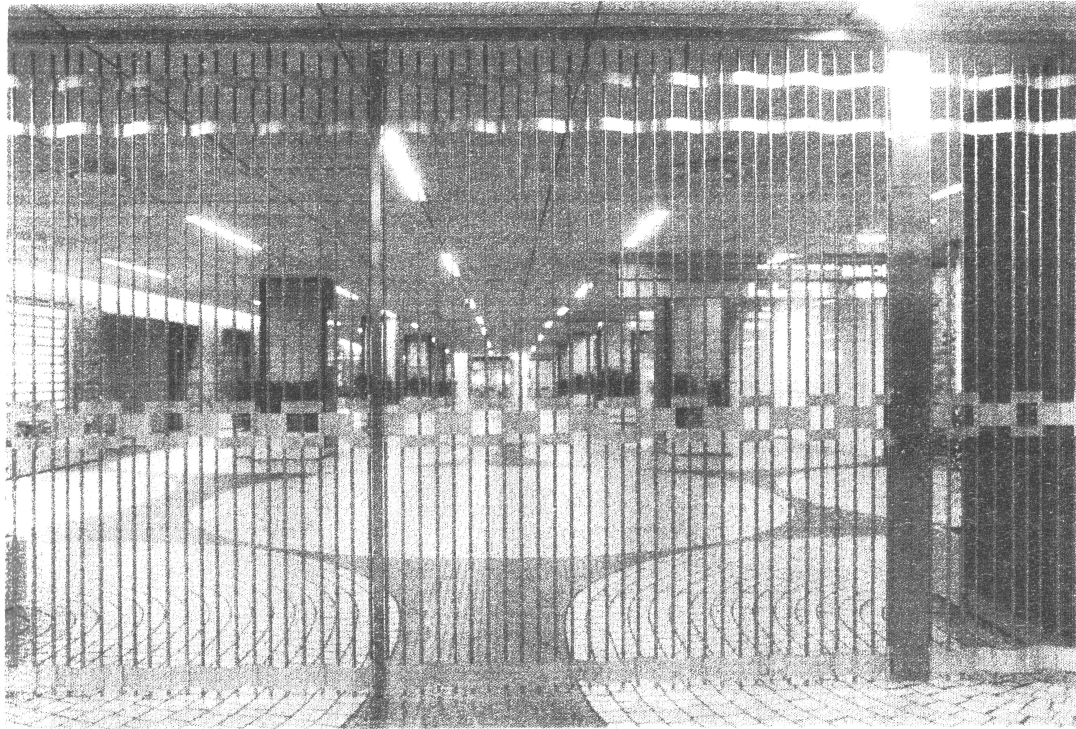
方や労働運動や市民運動だって建築土木産業で働く日雇労働者しか見ていない。日雇が下層の「花形」だった時代の遺物みたいなものである。「労働者」なんて言葉を私らが使えば「お前ら働いていないじゃないか」と烈火の如く世間からは怒られる。あのね、賃金奴隷のプロレタリアばかりが労働者じゃないっちゃうの、働かなきゃ食ってけないのは同じなの！ 本集めだって労働だ、ダンボール集めだって労働だ、廃品回収だって労働だ、テレカ集めだって、地見屋だって、まあ、あえて言えばエサさがしだって労働だ！ こんな事も分からずして社会の構造を分かったふりをして人々を見ると青島同様、蹴倒して路上に首を突っ込みたくなる。

これら、リサイクル産業や都市雑業の社会的な役割を世間が理解し、その地位をもっと底上げすれさえすれば、そこで働く人々の環境は今よりもっと上がり、また、それに従事する野宿者も今よりは安定した生活が出来るだろうし、チャンスさえあれば野宿からも脱せられる事だろうに。

いずれにせよ「ホームレス=怠け者」というイメージだけで語る「解決策」や「ホームレス救済論」というのは、そのうち必死に働いているこれら底辺の人々から手痛いしっぺ返しがかかるもんだ。

俺たちの居場所はどこだ

写真・大島 俊一



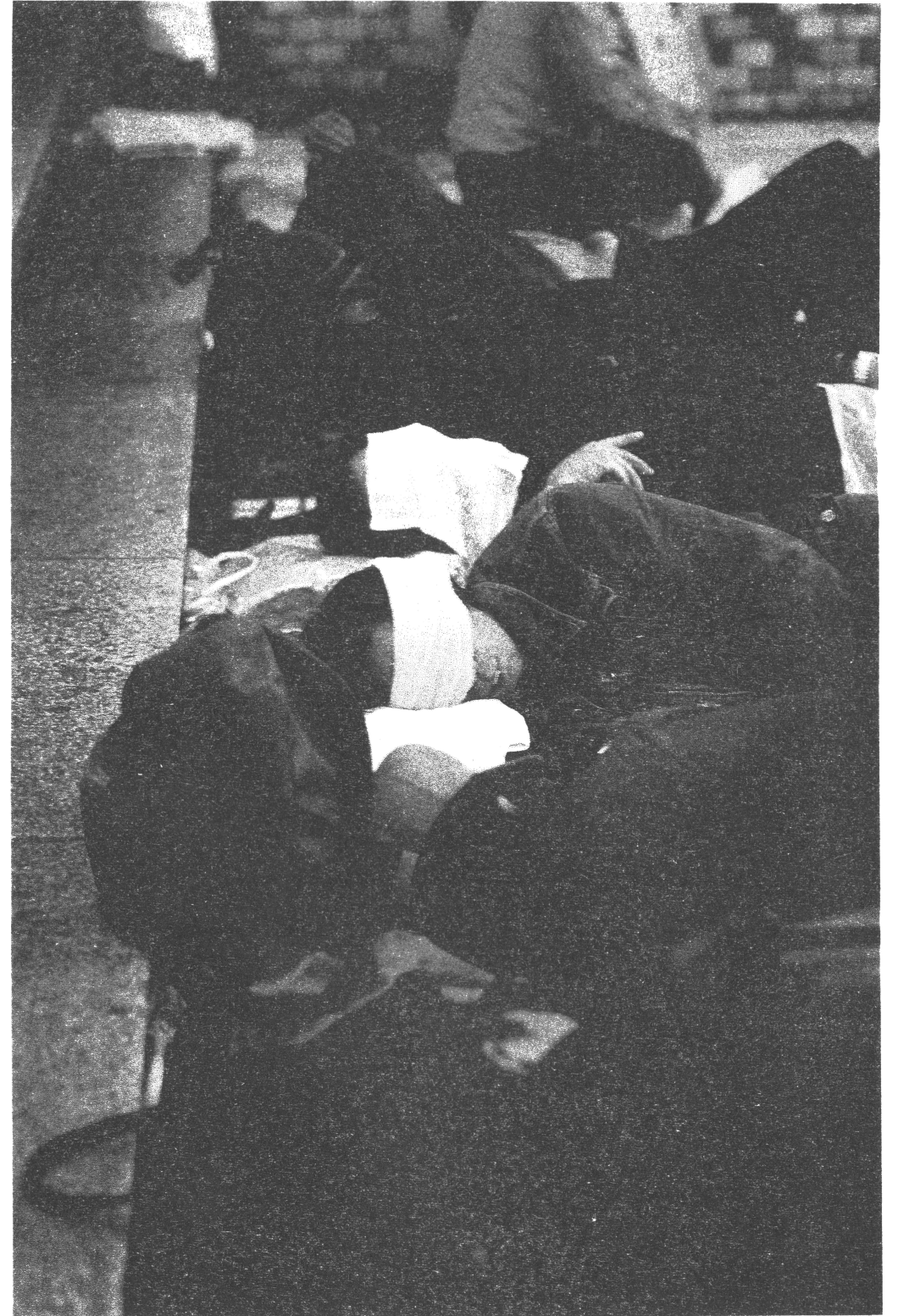
昼間迷惑と言われ、ガードマンによって座ることもできない場所。
夜中最終電車が終われば、誰も使わぬはずの地下街が、柵で閉じられる。



9 昼間、日溜まりでどうにか体を休めるが、日暮れとともに中央公園を追われる。

新宿写真館

No. VII



駅の一角に押し込められて眠る。狭いスペースに階段さえ利用し、横になる。10

底辺下層に組み込まれた

路上

考察

からの

VI、関東大震災と都市下層の拡散 そして朝鮮人労働者の流入

大正12年9月1日、伊豆沖30キロの海底を震源とするマグネチュード7.9の大地震が発生、横浜、東京をはじめとする関東一円は大震災にみまわれる。東京府における全壊家屋16,684戸、半壊は20,122戸、中でも地盤が弱く、しかも住宅密集度が高く古い家屋が集まる下町における被害は甚大なものであった。

大地震に続いて火災は市内全所で発生、強風にあおられ、またたく間に東京は火災地獄と化した。

「深川方面では、地震だつと驚みてゐる内に最う何箇所からも火の手が揚がってゐた。そしてその火の手が海から吹き寄せる強風で

煽られて、物凄く拡がるにつれて、風向は何度も何度も変る。変るたびに火の子は四方八方へ吹き付けられて、瞬く間に深川一面は本統に火の海と化して了まつた。その上を又、恐ろしい勢ひで旋風が荒れ廻る、全く言語に絶した凄惨の光景であった。」(「大正大震災大火災」大正12年)

東京の大火災は3日早朝まで続き、東京市の43・5%に達する10、485、474坪を完全に焼き払ってしまった。京橋、日本橋、神田、下谷、浅草、本所、深川の下町一帯はほぼ全家屋が全焼、東京市で見ても、全戸数の約62%が焼失した。死者、行方不明者は68,660名、重傷者は26,268名にも達した。中でも、本所区被服廠跡地、横川橋、錦糸町駅、浅草区田中小学校敷地、吉原公園、深川区東森下、伊予橋など、火に追われた人々が避難場所を選んだ場所での被害(身動きが出来ぬ程密集した中で四方から火の手が迫り、ほぼ全員が焼死するという惨劇)は甚大であった。

近年の神戸大震災でも明らかな通り、都市大天災には必ず人災が加わり社会的弱者に様々な矛盾が集中する。下谷、浅草、本所、深川のかつて貧民窟と呼ばれた伝統的な下層居住地も、明治以降工場街に形成された長屋部落やドヤ街も、この被害によって全てが焼失し、また上記地名からも想像出来るよう、そこに住み様々な生業をして来た多くの人々が圧死、または焼死したと思われる。また、辛うじて生き残った人々はみごとに路頭に放り出され、更なる苦汁をなめさせられる。

労働者がたどる最下層の環流点

笠井 和明

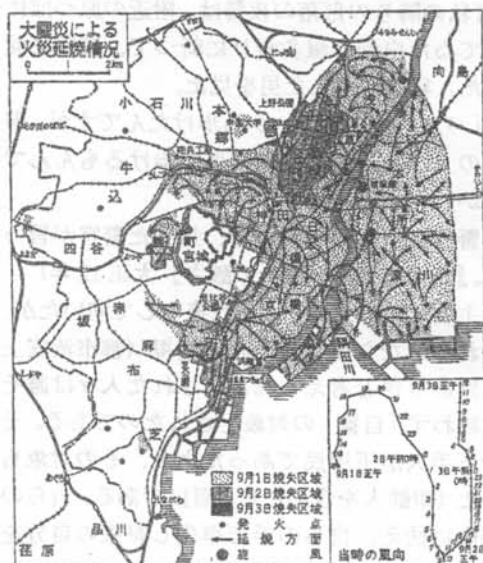
そして、そのみならず特異と言うべき歴史の悲劇がこの焼けたれた「帝都」を軸に繰り広げられて行く。

「夜警所を守る人々のスタイルは、百鬼夜行。先祖伝来の刀をさしたり、手製の竹槍をもつたりした物騒な手合いもあった。中には、ベースボールのユニホームに身を固め、右手にバットを持つと言う手合いもあった。通行人があれば一々嚴重に取り調べる。その答へが曖昧だと、通行を禁ずる位はいい方で、大概の場合には、殴りつけてしまった。」(横井春野「自警団の活躍(並びにその功罪)」大正12年)

困った事は、これら自警団に入り、6千余名と言われている朝鮮人虐殺を各所でひき起こした主要階層は都市下層民であるという事である。「自警団は軍部警察に教唆扇動され、都市中間層などの「旦那衆」の督励をうけ、都市貧民層が盲目的な排外主義的残虐行為に大量に、しかも自発的行為のよそおいをおびながら動員された仕組みのものであった」(岩村登志夫「在日朝鮮人と日本労働者階級」)「都会では薦職、大工、左官、土工、車夫、人夫、桶職、庭職等の所謂下層細民であり、地方でもこの階層に妓夫、農民、漁民が若干加わるだけで変化はない」(姜徳相「関東大震災における朝鮮人虐殺の実態」)

もちろん、様々な歴史書に究明されている通り、この夥しい虐殺事件は、単なる自然発生的な事件ではなく、混迷する政局の中でただちに戒厳令を敷き、被災者救済より帝都治安維持を優先させた軍部、警察が社会主義者、朝鮮人を

「適当処分」の対象とし拘束、虐殺を行なった事が「流言」を権威づけ、青年団、在郷軍人会、消防組など警察の都市治安下部組織の扇動の中、意識的に作られた「自警団」の暴走を容認して行く結果につながったとされている。上から意識的に虐殺の構図は作られて行き、その下手人たる立場に、被災後の混迷の中、無自覚にも一部の都市下層民は動員されて行ったのである。支配階級からする都市下層の位置はまさしく「下手人」の立場であった。支配階級は自らの手を血で染めない。支配との関係を自覚出来なかった人々は安易にこの歴史的犯罪に、おそらく喜々として手を染めたのであろう。



在日朝鮮人人口動向

年次	居住人口	年間就労者数
1909	*790人	
1911	2,527	
1912	3,171	
1913	3,635	
1914	3,542	
1915	3,917	
1916	5,624	
1917	14,502	14,012人
1918	22,411	17,910
1919	26,605	20,968
1920	30,189	27,497
1921	38,651	38,118
1922	59,722	70,462
1923	80,415	97,395
1924	118,152	122,213
1925	129,870	131,273
1926	143,796	91,092
1927	177,215	183,016
1928	238,102	166,286
1929	275,206	153,570
1930	298,091	127,776
1931	311,247	140,179
1932	390,540	147,597
1933	456,217	189,637
1934	537,695	175,301
1935	625,678	112,141
1936	690,501	115,866
1937	735,683	118,912
1938	799,878	161,222
1939	961,591	316,424
1940	1,190,444	385,822
1941	1,469,230	968,416
1942	1,625,054	381,673
1943	1,882,456	401,059
1944	1,936,843	403,737
1945 (1~5月)	2,365,263	121,101

(資料提供)朝鮮人強制連行の記録より。ただし「1941年」は「朝鮮半島」(一九四一年)。



逆に言えば都市下層は支配階級からいつまでも放置される沈殿した存在ではなく、支配の道具としての存在価値を授かったとでも言おうか。都市下層は不幸な形で階級支配の中によりやく位置付けられ始める存在と相成った訳である。

皮肉な事に自ら殺した人々も含めた震災後の死体処理や復旧作業もまた人夫の仕事となった。東京市が臨時で募集した人夫には300名が集まり死体処理に従事したと言われている。その他、避難所での糞尿のくみ取り作業、被災地での塵芥処理作業、バラック建設など人夫が不足する程の仕事量が舞い込んで来る。

そして新たな「被災者の貧民窟」が東京市が急場に仕上げた上野、日比谷公園など避難所に隣接したバラック長屋として形成されてくる。これら公営のバラックのみならず被災地にも自力によるバラックが次々と建ち始め、郷里に帰れない人々は、おびたしい「焼けトタンの不良住宅」での震災後の生活を始めるに至った。

震災直後から東京での被災者救援活動を精力的に取り組んだ賀川豊彦は都市にいつまでも残るこのバラック群を見て、路上に放置された下層労働者層への住宅政策がないことを嘆く。「バラックの建設は、東京市の当局の頭の無いことをよく暴露した。東京市の役人は、バラックの住民に対して随分不親切だ。当局の考へでは、最初からバラックの住民を早く立ち退かせる為に、出来るだけ粗雑に造つて、一刻も早く立ち退かせるやうに、出来るだけバラック避難者を虐待して追払ふ方針であつた」「…震災後既に一年になつてまだ2万の公営バラックが建ち、8万の罹災者がそこに這入つてゐることを見ても、当局が如何にこの点に就いて近眼であつたかが思われるのである。今日尚ほ、日比谷公園、芝離宮、芝公園、明治神宮外苑、上野、千駄ヶ谷、本所、

朝鮮人虐殺や社会主義者虐殺の影に隠れ、多くの日本人被災者もまた「間違われて」虐殺された事が証言されている。

『私の隣の部落の夜警は、附近の原つばに寝てゐた白痴を滅多斬りに斬つて、警官に渡した。私は斬られた男を見た。』

「バカで神経が鈍いから歩けたんですが、普通の人なら、とてもあの傷で歩けるもんんですか」

警官に引致しておいて、帰つた警官が言った。』(細田民樹「運命の醜さ」大正12年)

主に朝鮮人にその刃は集中して向いたが、そのみならず社会から異端視(都市治安上問題ありきと考えられた)された人々は誰それ構わず「自警」の対象とされたのである。その下手人が下層民であつたよう、その対象もまた(朝鮮人を含めた)下層民である。自らの運命に怯え、自らの手で率先し将来の自分を殺して行つた凶がここにある。

徳川邸、安田邸、被服廠跡、深川越中島に於いて、貧民窟的な公営のバラックのあることを見て、何人が悲しまないであろうか」「大正12年11月中旬に調べた時には、東京市内に於いて焼けトタンのみによって五方一即ち前後左右及び上方一全部を焼けトタンによつて囲んだ家が三万一千軒であつた。…その内約5割は辛うじて薄い鉄板を買つて来て、焼けトタンに代へてゐるけれども、その為に住宅が改善されたとは少しも見えない。雨の時に於いても、暴風の時に於いても、此の薄板のバラックは随分苦しいやうである。暑さに於いても到底凌ぐことは出来ない不良なものである」「私は東京市内に於いて少なくとも五万軒の小住宅を直ちに建てる必要があると思つてゐる。震災地帯に於いて少なくとも七万七千軒位ものは政府は直ちに建てなければならぬと思つてゐる。是に対する問題が臨時議会などに於いて一向論ぜられなかつたことは、呉れ呉れも残念だと私は思つてゐる」（「震災救護運動を顧みて」大正13年）

けだし、この国に於いてはこの当時も、また今日までも、とりわけ低所得者層に対する住

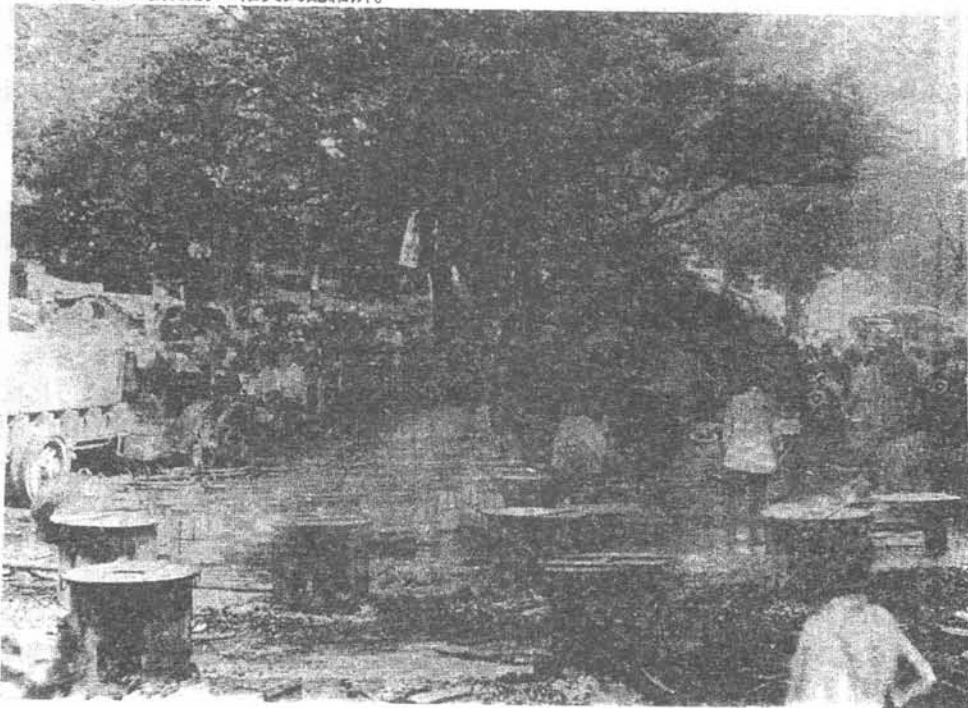
宅政策の思想は宿つてはいない。庶民生活はバラックのまま放つたらかし、手をつける時はクリアランスで追い払うだけ。基本的にはその繰り返しである。

「帝都復興」期に市営アパートや同潤会アパートなどが政策的に建てられたけれども、これらは基本的には職工労働者、会社員、官公吏、教員など「新中間層」向けの住宅政策であつた。同潤会が唯一行なつた社会事業は大正15年、深川猿江裏町の「不良住宅改良事業」として土地収容法を適用しバラック小屋をクリアランスをしながら巨大な共同住宅アパート群を作りあげた位である。もちろん強制的な移住を伴つてである。

さて、焼け出された下層の民はその後どう
いう変遷を辿つたのか？

「大正の中ごろまでの東京の貧民窟といへば、神田の橋本町、芝の新網町、四谷の鮫ヶ橋、下谷の万年町が四天王といわれていたが、関東大震災以後は、鮫ヶ橋にはなおいくらかの貧民が住んでいても、万年町と新網町にはほとんど貧しい人々の影をたつた。

▼上野自治会館前の罹災民配給所。



震災による旧市域「細民地区」の変遷

	昭和初頭まで残存			残存「細民地区」計			震災で消失		消失「細民地区」計
	江戸期に発生	明治期に発生	明治期に発生し震災で破壊後に再生	地区数	戸数	木賃宿軒数	江戸期に発生	明治期に発生	
麴町区									
神田区							1		1
日本橋区							1		1
京橋区	1			1	20		2	2	4
芝布区		2(1)		2(1)	30	12	1 (新網)		1
赤坂区									
四谷区	2	1(1)		3(1)	210	49			
牛込区	1			1	40				
小石川区	1	4		5	586				
本郷区		1		1	15				
下谷区		1		1	20			7	8
浅草区			2	2	200	75	1 (万年)	4	4
本所区			2(2)	2(2)		136		13	13
深川区			1(1)	1(1)		83	3	9	12
計	5	9(2)	5(3)	19(5)	1,121	355	9	35	44

出典 草間八十雄「大東京の細民街と生活の態容」(前掲『日本地理大系 大東京篇』所収)より作成した。

備考 括弧内は木賃宿中心の地区数。

	大正9年「細民地区」	昭和6年「不良住宅地区」	大正9年「細民地区」
	数	数	数
麴町区	3		
神田区	4		
日本橋区	2		
京橋区	6	1	1
芝布区	5		
麻布区	3	2	1
赤坂区	2		
四谷区	10	3	3
牛込区	8	3	2
小石川区	11	15	10
本郷区	8	2	1
下谷区	10	2	
浅草区	15	1	1
本所区	25	3	2
深川区	31	2	
計	143	34	21

出典 東京市社会局『東京市内の細民に関する調査』大正10年、同『東京市不良住宅地区調査』昭和7年より作成。

備考 大正9年の数値は、昭和6年と比較するために、20戸未満の地区を除いてある。

そのかわり三河島、日暮里、南千住、西新井、吾妻、板橋などに貧しいものがあつまった。なかでも日暮里には千束三ノ輪方面、万年町、山伏町の貧民がしげんに追われてきて一大巢窟をなした。」(『日本残酷物語5』東京の奈落より)

東京郊外の市街化は大震災を境に急速に広がる。山の手の住宅地は飽和状態となりつつあり、震災によって避難した「新中間層」向けの住宅が省線沿いの畑に建設され、池袋、新宿、渋谷などターミナルの整備と郊外電車の開通などで「大東京」の骨格が瞬く間に出来上がった。とりわけ被災地を軸とする「帝都復興」による区画整理がクリアランスと平行して進められると、この地の旧来の貧民窟居住者は追いやられるよう都心部から旧市域の外側へと拡散を始め、新たな流入者もまたその地に安住する。

「東京の地図をおおまかに図式化するならば、皇居周辺の官庁街、ビル街によって構成される都心のまわりを、商業地区、住宅地区、工業地区、第二の住宅地区といった

圏が外へ外へと年輪のようにかこんでいる。下谷、本所、深川などの貧民地区はこの商業地区と工業地区のふれあうところにあり、三河島、千住、池袋周辺、新宿周辺の貧しい地帯は、住宅地区と工業地区がふれあう地域にくりひろげられる。そして工業地区が第二の住宅地区に接する地に足立区の本木などの貧民地区がうまれてくるのである」(同上、秩序なき秩序より)

この法則性が正しいか否かはともかくとして、震災以後の都市貧民の居住地帯は明らかに旧来の居住地の崩壊ないしは縮小、そして地域の拡散と分散の道を辿る。(表現はなんだが)「スラム(貧民窟)は都市の成長、混乱、異変にしたがって移動し、寄生虫のように拡大または縮小し分裂している」(同上)のである。

震災は多くの社会的弱者を路頭に迷わせブラック生活を余儀なくさせた。土地や家を持たずに店子生活を続けてきた人々、帰る故郷もない人々はそれでも都市にしがみつき生きざるを得ない。が、震災を機とする都市開発という「進歩」の歩みは、それらの人々の事など

顧みずに怒濤の如く突き進んで行く。貧民の居住地もまたそれに合わせ散在し、移動を繰り返すが、そこも安住の地にはなり得ない。都市における貧民の歴史は、このような不幸を常に持ち合わせている。だから、一つの集住地域が例え無くなったとしても、それは下層の消滅という訳ではなく、また別の所へと移動をしたにすぎない。ちりじりになり、また集まり、ちりじりになり、また集まりの繰り返しも言えよう。

東京市は昭和7年の「東京市不良住宅地区調査」の中で当時の下層集住地域を以下のような「定型」として示している（中川清「日本の都市下層」より）。

①庶民階級の集住地—自由労働者、熟練労働者、手工業者、行商人、小商人、下級俸給生 活者等の小額所得者密集地

②工場街—工場隣接地、工場の下請け労働、家内労働者密集地

③木賃宿街—以前からの自由労働者、行商人の密集地

④バタヤ街—紙屑拾い、浮浪人、乞食等の密集地

⑤普通住宅間に一団地として存在する地区

⑥畑地または荒蕪地に孤立的に一団地として存在する地区

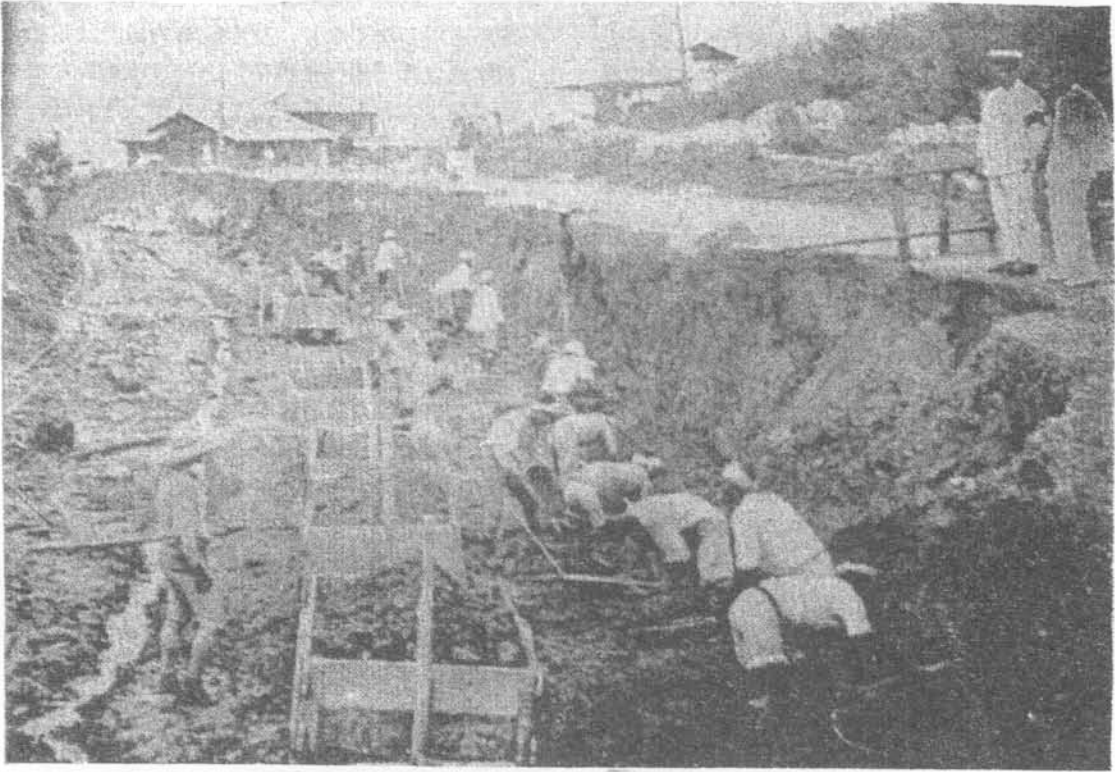
すなわち、これらの拡散、分散の過程を経、階層としての都市下層は実態としてはより見えにくく、都市の底部により広く深く組み込まれて行ったと言えよう。例えば四谷区旭町の人足や屑拾いが都市下層の全てを表現するのではなく、その最下層には、墨田公園の浮浪者やルンペンがいるよう、貧民窟という一地域が下層全てを表現できなくなった訳である。中川によれば「貧民窟」や「細民部落」を集約的表現とする都市下層概

念が通用しなくなり、社会政策的認識は昭和初年代以降「要保護世帯」という政策的な概念が発生すると分析をしているが、それだけ都市下層は都市の中に広範に点在するよう構造化されたのである。しかも不安定でいつでも排除される状態のまま。

「帝都復興」と共に広がるこの都市下層ベルトに植民地化されていた朝鮮半島から大量の人々が流入してきたのも、この時期の特徴である。日韓併合後、悪名高い「土地調査事業」により朝鮮全土から農地を奪い、結果、大量の離農人口を発生させ、朝鮮本国は極度に窮乏化した。これに目をつけたのが日本の紡績産業、炭鉱産業、土木産業である。離農した人々は出稼ぎ以外の職はなく、また当時朝鮮半島の工業化は進んでいなかった関係上、生きる糧を求め海を渡ってこざるを得なかった。この状態に付け込み「労賃は三倍出す」などの甘言を弄した労務ブローカーの手筈で、日本の様々な産業底部に朝鮮人労働者は送り込まれる。これは単なる「人手不足」一般の問題ではなく、日本人以下の賃金が日本の産業の利潤獲得には大いなる魅力であったからに他ならない。こうして朝鮮半島は廉価な労働力の供給基地の役割を担わされることとなった。



四谷十日市付近のバラック。



九州八幡市における朝鮮人の土工たち

「彼等の多くは、府下に置ける細民居住地帯である三河島町、日暮里町、千住町、南千住町、寺島町、吾妻町、亀戸町、大井町、淀橋町、高田町、立川町等に居住し、市内としては本所区、深川区、芝区、小石川区、神田区等に多く居住している。而して彼等は、そのほとんど全部がバラック同様の長屋に居住するもので、中には震災当時の焼トタンや、板を買い集めて自らバラックのような仮小屋を架設して一家のものが雨露をしのぐものもあり、」

（「在京朝鮮人労働者の現状」昭和4年）と都市の下層地域に住みながら「帝都復興」の道路工事人夫として働く者、地方の「タコ部屋」「監獄部屋」に送り込まれ、鉄道、ダム、道路工事で働く者などと、日本全土に安価な労働力として朝鮮人労働者は瞬く間に組み込まれて行く。

この時代に渡日した金相泰は昭和初期の亀戸における下層社会における朝鮮人社会をこのように記している。

「この下町の日本人社会の中に散在する朝

鮮人社会は、二重の「賤民族」として蔑視された。例えば日本人女性が朝鮮人と結婚でもしていれば後指をさされた。このような社会生活の環境で、その生活様式は共同生活の飯場形態であり、被抑圧民族同志の寄り合い運命共同体的なものであった。…もっとも社会的で人間的なものであった。困っているのが朝鮮人である、ということばかりでなく、共存する地域社会で、例え日本人であっても面倒を見合い、病人であれば病人のために、病気で帰郷の旅費がなければ、みんなで出し合って旅費を捻出して里帰りを手伝う。…どんなに賤しめられる仕事にも自らが働くことによって共同体的生活の経済基盤を支え、子供、病人、老人の人間の尊重を守る。…客観的に存在する被差別、被抑圧、被貧困という存在条件と必然的に闘う階級的な政治的道義観であった。つまり、下層の労働者人民の生きる闘いであったのである」「このような被抑圧人民階層の社会においては、日本人、朝鮮人という差別意識もなく、人間同志の恋があり、結婚があり、人類の生命の遺産たる子孫が誕生した。誰

からも犯すべからざる自然体がそこにあった」(「ある被抑圧者の手記」より)

朝鮮人を虐殺した日本人都市下層と、朝鮮人労働者と下町で手を取り合って生きて来た日本人都市下層、共通するのは只、極限的に虐げられ、貧困にさいなまれて来たという社会的に強いられた関係と現実だけである。

自警団に組織され、虐殺に動員された下層民の構成は「子飼い、部屋者」と呼ばれる、親方、小方関係が強く残された人夫、職人層であり、米騒動に参加したプロレタリア化した日雇労働者とは、その質が違うという強調のされ方も一部にはされているようだが、これはあまりにも「下層労働者」を美化した考え方である。下層、とりわけ都市下層は、「労働者」であろうがなかろうが、存在そのものが決して階級的でも戦闘的でもない。階級的、戦闘的になる要素が社会的により多く作られている、すなわち、それだけ資本や社会に虐待され、搾取され、差別されているというだけである。その現状打破のエネルギーの発露のされかたは他方では、自然発生的な米騒動のようにもなるが、一步間違えれば虐殺の下手人の立場に容易になり得るという事であり、上が組織

をするのか、下が組織をするのかの攻めぎあいの立場により強く置かれているとでも言えよう。とりわけ温存させられた封建的な関係はこの攻めぎあいを激しくさせる大きな要素である。

「ルンペン・プロレタリア階級、旧社会の最下層から出てくる消極的なこの腐敗物は、プロレタリア革命によって時には運動に投げ込まれるが、その全生活状態から見れば、反動的策謀によるこんで買収されがちである」(マルクス「共産党宣言」)

このあまりにも一面的な「ルンプロ規定」を言葉通り信奉している人々は、都市下層はファシズムの温床だとばかりぼっさりと見放し、他方でそうでないと主張する人々は、都市下層とりわけ日雇労働者は本来のプロレタリアで本質的に階級的で戦闘的であると言う。もっとも、どちらも同じ穴のムジナで、肝心なのは、都市下層民は昔からヤクザの供給源であると同時に階級闘争の源泉であり、主人公であった、これら背反し矛盾しあう歴史的存在が下層の本質であるという事実を直視することではなかろうか。

彼、彼女等はありのままの姿で歴史を動かして来たし、これからも動かして行く事だろう。問題なのは、どう自然に無理なくそれを動かしていくかだけの問題であり、それ以外はどうしても良い事である。(つづく)



関東大震災の時に虐殺された朝鮮人の屍体

毎年すいませんが、今年も 一つお願いします！

第5回新宿越年・越冬闘争カンパの集中を！

第5回新宿越年・越冬闘争が11月29日から本格的に突入しました。毎週日曜の炊き出し活動、週末集中のパトロール（夜回り）活動、医療相談、福祉行動、越冬対策入寮行動を軸に毛布、衣類、ホカロンの放出など夥しい仲間の命を守る活動がこの時期新宿で行なわれます。また、12月23日の越冬支援連帯集会（別紙参照）から、年末27日から来年1月4日までの越年闘争も、新宿区立中央公園を拠点に1週間の連日行動が予定されています。今回は1月2月の厳冬期も含め越年・越冬体制を崩さず3月末まで集中し頑張っていきたいと考えています。本年2・7西口火災で私達が教訓化した事は「一人の命の限りない尊さ」であります。昨越冬期に亡くなった仲間達に不様な姿を見せない事が残された私達に唯一出来る事だと思ひ、本越冬は情性に陥ることなく「仲間の命を仲間の力で守る」初心に返った取り組みをとことん行なっていきたいと思ひます。

是非私達の越冬を支えて下さい。越冬のための米、毛布、ホカロン、物資カンパは一つ残らず無駄なく使わせて頂きます。また越冬カンパは米や容器、箸など越冬必要物資の購入のため使わせて頂きます。新宿のみならず全都の仲間がこの厳しい冬を越すため、全国の支援者の方々のご協力を重ねてお願い致します。（事務局一同）

会計報告（98年10月）

収入	郵便振替カンパ	8口	51,000
	通信会員費	1口	5,000
	通信売上		3,200
	個人、団体カンパ		10,200
	計		69,400

収支	△196,292
前期繰越金	834,112
次期繰越金	637,820

支出	炊事関連費	72,093
	交通費	72,140
	印刷代	10,430
	コピー・DPE費	10,310
	文具・図書費	590
	発送費	600
	車両燃料・高速費	7,319
	電話代（9月）	11,744
	日雇全協大会参加経費	67,587
	全都実分担金	11,079
	雑費	1,000
	計	265,692

*カンパ送り先

郵便振替口座 00170-1-723682
「新宿連絡会」

*物品カンパ送り先

☎111 東京都台東区日本堤1-25-11
山谷労働者福祉会館気付け 新宿連絡会

*お問い合わせは 03-3876-7073

もしくは 030-818-3450

（笠井携帯電話）

編票・発行

新宿野宿労働者の生活・就労保障を
求める連絡会議（新宿連絡会）

連絡先：☎111 東京都台東区日本堤1-25-11
山谷労働者福祉会館気付け

☎ 03-3876-7073

FAX 03-3876-1869

現地：☎ 030-818-3450